

みなと

今・むかし新聞

第12号

平成22年4月

「汐留シオサイト」は、

鉄道発祥の地です！

にぎわいのある町！「汐留」シオサイト。かつては、「貨物駅」。そのまへは、「新橋から横浜まで開通した日本最初の鉄道施設」。さらに時代をさかのぼれば、武家屋敷が集まった地域でした。

にぎわいのあるまち「汐留シオサイト」

「汐留シオサイト」の南側には、「港区立イタリア公園」があります。きれいに整備されており、目にやさしい緑の芝生が、心地よさを感じさせてくれます。

また、東の方に目を移しますと、江戸時代に作られました「旧浜離宮庭園」があります。この庭園には、四季折々の花が咲きます。お正月には、「放鷹」(ほうよう)といひまして、鷹を放して「鷹狩」の姿を見ることが出来ます。「鷹匠」と「鷹」との

心の通う姿を見ることが出来ます、

新橋は、鉄道発祥の地

「汽笛一声 しんばしを 早わが汽車は 離れたり……」 大和田建樹の「鉄道唱歌」は、ここが起点です。

明治五年九月十二日、新橋・横浜間に鉄道が開通しました。営業距離・約二十九キロ。この間の駅は、「新橋駅」「品川駅」「川崎駅」「鶴見駅」「神奈川駅」「横浜駅」の六駅です。当時の時刻表を見ますと、朝方八時から夕方六時まで「九往復」。五十三分で走ったそうです。



発掘調査をしました！

汐留地域を発掘調査しましたら、鉄道関連施設が見つかりました

まず最初に「旧新橋駅舎跡」です。建物の礎石です。次は、プラットフォーム。さらに、汽車を方向転換させる時に使用した「転車台」。面白いのは、お弁当を食べる時に利用した「土瓶」や「湯呑」です。当時の乗車券も見つかりました。

当時の日本人は

習慣として「建物」に入るときは、履物を脱いでおりました。

汽車も建物と考え、乗る時に「履物」を脱いで乗ったため、駅で降りるときになつて「履物がない」と騒いだお客がいたと、明治の新聞に出ておりました。



← 機関車の向きを転換する転車台跡

鉄道施設の下からは、武家屋敷が！

江戸時代、この地域には、「播磨龍野藩・脇坂家(今の兵庫県)」「仙台藩・伊達家」「会津藩・保科家」の屋敷がありました。

調査しましたら、屋敷の境として使用した柵や堀割を始め、「船着場」や「庭園の石積み」、当時の武士が使用した数多くの「茶碗」等が見つかりました。さらに、上水施設が屋敷の地下を網の目のように作られ「飲み水」として使用されていた施設も見つかりました。

地域の歴史がここにあります

このように、この地域には何百年の間に築かれた歴史があります。先人が生きていた「生活」の匂いが感じられます。

汐留の地域の「今・むかし」を、述べてまいりました。この地域の歴史を調べながら、先人の知恵・知識を学んでいきたいと思ひます。

(文と写真・清田和美)

区内あちこち

東新橋あたり

浜松町の駅から「海岸通り」に出たら左折して、浜離宮正門に向かう歩道が近頃のお気に入りだ。道幅が広く立派な道だが、すぐ気がつくのは通行人が少ないこと。生活道路ではあるが遊歩道的な趣みきがかかなりあるのが、先に進むに連れて判ってくる。

まず手入れが行き届いた花壇、ヴィーナス像などが飾られてあるイタリア公園が隣接していて、まるでこの道と一体のようだし、坂が作ってあったり、汐留開発で出土した石垣積みの再現など、工夫がされている。とはいえ、海岸通りの車の往来は激しくて、騒音やホコリと共に押し寄せてくる圧迫感も相当なものだ。完全シャットアウトができれば良いが、さりとて陽光までさざざりたり、目の前を塞いでしまう壁を立てては窮屈(きゅうくつ)だろう。



ここでは人と車を隔てるのにコナラ・ウバメガシ・モッコク等々の背丈のある常緑樹が使われ、さらに隙間を埋めるように、いろいろな低木(つじ・寒椿・雪柳等々)が植え込まれている。阻止率は落ちても、仲々なアイデアで、この道には木々の壁が似合っている。

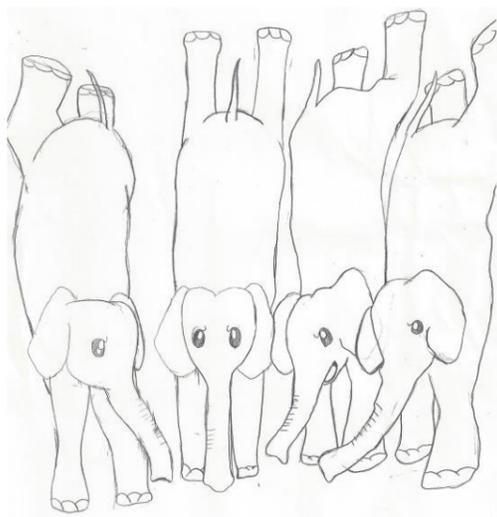
もう浜離宮。一キロ足らずのコースだが、のんびり歩いた。左が銀座、右は築地に近い。どっちも活気に溢れた街だから、少し緩ませていた神経を元に戻して貰いに立ち寄って行こうか。

(文・武恒雄 写真・井上繁)

○「語り部」と子どもたちの交流報告

芝小「語り部」子どもたちへのお話

「語り部」は、区内の小学校へ出向いて昔の遊びや暮らしを紹介しながら子どもたちと交流する活動をしてい... 昨年九月末、戦争のころのお話を子どもたちへして欲しいという先生からの依頼で、「語り部」は芝小三年生の「地域の高齢者の方と交流しよう」という学習の時間へ出向きました。「語り部」は戦争の体験があるだけに、その悲惨さを語り告げたいと、空襲で家も学校も焼けたお話やメンバー全員で作成した学童集団疎開をテーマにした紙芝居を実演しました。時代こそ違うものの、子どもたちは自分たちと同じ小学生の話ということから、親と離ればなれになつて、食べ物も不足していた疎開当時の子どもたちの苦しく、辛かった様子を描いた紙芝居を熱心に見てくれました。「語り部」の話聞いた後、子どもたちはさらに『ちいちゃんのかげおくり』という、戦争で命を落とした女の子の話を読んで、戦争のころについて学びました。



「ぞうれっしゃがやってきた」サーカスの場面の絵

誰が演じるかなど、オーディションで決めていきました。子どもたちは長い台詞や歌と踊りもすぐに覚えて、週二〜四回の稽古にも熱が入り、家でもほとんど毎日台詞をそらんじるほどでした。お母さんが結末を聞くと「見てからのお楽しみ！」と劇への期待をもたしてくれました。劇で使う小道具は図工の先生が子どもたちと協力して作り、ゾウは子どもたちが描いた絵で表現しました。

こうして交流をへて、三年生二クラス七十名の子どもたちと先生方による合唱劇『ぞうれっしゃがやってきた』への取り組みが始まりました。劇は、戦争中全国の動物園において、食料不足や治安維持の理由で、動物たちが次々と殺されていった中、名古屋の東山動物園のサーカス団出身のゾウ四頭のうち戦後まで生きのびた二頭を見るため、昭和二十四（一九四九）年に全国から名古屋へ子どもたちを乗せた「ゾウ列車」が走った実話をもとにしています。

台本は三年生向けに先生が手直した後、子どもたちが冊子に仕上げ、配役は動物園の園長さんや飼育係、兵士を

『一匙の塩』

戦場で戦って傷ついた兵士の介抱をするため軍隊と共に行動する女性達、その名は従軍看護婦。ここに掲載しますのは、この前の戦争でフィリピン派遣軍の従軍看護婦であった福島県出身の半田テルミさんが書かれた「青春の回想」の中の一文です。昭和二十年の半ば頃、食べるものもない山の中を、栄養失調、マラリア、赤痢、チブスとあらゆる病魔に冒され次々とたおれて行く友、その中の行軍は言語に絶するものがあった。

あらゆる草、木の芽と言ふ木の芽を食べて飢えをしのぐ中であつて、最も貴重なものは水と塩であつた。その塩がなくなつた今、あと何日生きられようか、と思つた時たまたまこのあたりを通過する部隊のあることを聞いた。早速思いついて友達と二人で乞食をしようと相談をした。その日は相変わらずの灼けつくような南の太陽が照りつづけていた。いよいよ部隊が通るといふ話があり、私達は部隊が小休止に使われるという水の出る場所へ行き、今か今かと待つていた。二時間も待つたらうか、遠くから大勢の足音が近づいてきて、やがて「小休止」の声がした。日焼けして汗まみれの兵隊さん達が水を飲みに来た。どの顔も、どの人達も私達と同じように、戦いにやつれていた。私はどうしたら塩を貰えるか考えながら、胸がドキドキしていた。然し、これではいけない。今塩を貰わなかつたら、友達も患者さんも死んでしまふ。勇気を出して！と心に言い聞かせて、思いきつて、「兵隊さん、お塩をお持ちでしたら、少し分けて頂けないでしょうか」と、蚊のなくような声で頼んでみた。と、「何！なんなんだ女か」と言つたきりだった。又、次の人に言つてみた。どの人も「そんなの無いよ。自分のものもないのに！」という返事だった。無理もない、と思ひながらもあきらめる訳にはゆかない。来る人毎に頼んでみた。と、「よし、一匙あげよう」と言つてくれる人があつた。顔を上げると、にっこり笑つたその人の肩に軍曹のマークがあつた。一匙の塩を見た時、急に涙が溢れてきてあたりが見えなくなつた。「ありがどうございませう」と言おうとするのだが声にならない。ただ深々

と頭を下げると、涙がとめどなく流れた。周りにいた兵隊さんがみんなだまつて一匙づつ私の持つている水嚢に塩を入れてくれた。私は水嚢の口をあけたまま、恥ずかしさを忘れて最後の人迄歩いて塩を貰つた。塩は水嚢の半分位になつていた。しつとりと重い岩塩がどんなに嬉しかったことだろう。これで又何日かみんな生きて生きられる、と思うと、袋を頬にあて、泣いてしまった。

肩を叩かれて驚いて振り返ると「看護婦さんですか。何隊ですか？」と聞かれた。「福島班です」と答えると、「大変ですなあ、頑張つて下さい。もし生きて帰れたら一生かかっても得られない思い出になりますよ」と言われた。「出発」の声がかかり、部隊は移動を始めた。私達は姿が見えなくなるまで見送つた。水嚢の口をしめる時、岩塩を一粒舐めてみた。「甘い」塩が甘かつたかしら、と、その時思つた。私は今でも味付けの塩を一匙すくう度に、あの時これがあつたら、もつと多くの人々の命を救うことができたろうに、と、しみじみ戦争の悲惨さを思い、平和を祈らずにはいられません。（原文のまま）

（この文章は筆者の兄上と戦友であつた元桜田小学校校長皿井治氏の提供によるものです。）

編集後記

風が吹けば飛び散ってしまうような紙片に過ぎない小新聞ですが、ここに掲載の文章を目にされて、なんらかの感想をお寄せ頂けるようであれば幸いです。

生涯学習センターでは、「語り部」の学習会を二階の「さくらだ記念室」で毎月、第二・第四水曜日の午後二時から開催しております。生まれ育つた港区の話を聞かせ下さい。関心ある方々の参加をお待ちしております。

問い合わせ 03・3431・1606

発行 平成二十二年四月一日

(財) スポーツふれあい文化健康財団

生涯学習センター